

## 「マルタとマリア」

2023年06月16日

マルタは、いろいろともてなしのために忙しくしていたが、そばに立って言った。「主よ、妹は私だけにおもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことに気を遣い、思い煩っている。しかし、必要なことは一つだけである。マリアは良いほうを選んだ。それを取り上げてはならない。」（ルカ10：40～42）

主イエスは、弟子たちと共にエルサレムに上って行かれた。その途中、エルサレムまで3キロほどのベタニア村に入られた。この村に、マルタ、マリアという年若い姉妹が住んでいた。彼女たちには両親がなかった。主イエスは、この姉妹を愛し、しばしば立ち寄り、励ましておられた。二人も主イエスを慕い、来訪を心待ちにしていた。

主イエスが久しぶりに来られたので、喜んで迎え入れた。この時、妹のマリアは主イエスの足元に座って、主イエスの話に聞き入っていた。姉のマルタは、おもてなしをしないと、忙しく立ち働いていた。両親がいないので、姉のマルタは家庭のことをテキパキと対応、処理することが習わしになっていた。妹のマリアは内気な性格であった。主イエスの来訪を受けて、マルタはいつものように立ち働いて、心からのおもてなしをしようと、懸命であった。ところが、マリアは主イエスの足元に座り込んで、話を聞いていた。マルタは、自分ばかりが働き、何もしないマリアに腹が立ってきた。そこで、主イエスに、「主よ、妹は私だけにおもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」と言った。これは、客に言う言葉ではなく、マリアに対し、「私ばかりに仕事をさせないで、あなたも手伝ってよ」と言うべきである。それを、主イエスに言っているということは、本当に親しく、甘えを持っていたことを示している。主イエスはマルタの不満を聞いて、「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことに気を遣い、思い煩っている。しかし、必要なことは一つだけである。マリアは良いほうを選んだ。それを取り上げてはならない」と言われた。この言葉に対し、異論も持つ人がいる。マルタのように働く人がいなければ、もてなしができないから、何もしないマリアを褒めることに納得できないからである。しかし、主イエスの言葉は、その場、その時に発せられた言葉として聞くべきではないか。主イエスは、神殿当局に殺されることを覚悟して、エルサレムに上ろうとされていた。今は、最後になる時であるから、心を傾けて聞いてほしいと思っていた。マリアは、それに応え、聞き入ってくれた。だから、マリアは良い方を選んだ、それを取り上げてはならないと言われたのではないか。ヨハネ福音書12章に、主イエスがベタニアに来られ、マルタはいつものように給仕で立ち働いている夕食のシーンが記されている。この時、マリアは高価なナルドの香油を主イエスの足に塗り、髪で拭いた。香油の香りが部屋一杯に広がった。宣教団の会計をしていたユダは、香油を300デナリオンで売れば、貧しい人を助けることができると咎めた。主イエスは、「この人のするままにさせておきなさい。私の埋葬の日のために、それを取っておいたのだ」と言われた。誰一人、死を決意した主イエスを理解していなかった時、マリアは、お別れの時が来たことを悟って、埋葬の備えの香油を注いだのである。主イエスはどんなに慰められたであろうか。聞くことに心を向けたマリアだから、死に逝く主イエスを受け止め、最大の愛と信仰の献げものをした。主イエスに聞き入る者が、真の奉仕ができるのである。